

京都大学経済学部同窓会会報

京都大学経済学部同窓会 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学経済学部内

ごあいさつ

近況報告



京都大学経済学部同窓会理事長
大学院経済学研究科長
経済学部長
西村周三

同窓生のみなさまにはいかがお過ごしでしょうか。恒例により大学の近況をお伝えします。京都大学は、昨年四月からの「国立大学法人化」以来、管理運営体制などは少しずつ改革が見られるものの、なにしる学生数二万人あまり、教員数約三千名、職員数二千数百名の大所帯です。いまのところは、業務が削減できるところか、従前からの仕事に新しい仕事が増えるといったありさまで、まだ法人化のメリットをいかに切れていないというのが実情です。

このような状況下、京都大学経済学部は、ここ一年、さしたる大きな変化もなく推移しましたが、これは、来年四月に制度的に大きな変化を示すための準備期間であったとご理解いただきたく存じます。過去一年間、経済学部と経済学研究科では、ここ数年の懸念

案であったいわゆるビジネススクール設置の準備に努力を傾注し、ようやくこの六月に文部科学省に「経営管理専門職大学院」を設置申請することになりました。いわゆるMBAコースの日本版です。まだ申請段階であり、これから大学設置・学校法人審議会の審査などを経て正式に認められることとなります。それまでには紆余曲折も予想されますが、一応現段階では次のような構想を計画しています。まず今回の構想は、経済学部・経済学研究科が中心となるもの、工学研究科との共同による設置となります。具体的には経済から十一名、工学から五名の専任の教員が異動し、これに加えて情報学研究科からの十三名の兼任教員をはじめ、他研究科からの応援を求めて、文字通り京都大学の全学的な支援のもとで発足します。具体的には、次の三つを、い

わば目玉プログラムとします。①「事業創再生マネジメント」、②「プロジェクト・オペレーションズマネジメント」、③「フアイナンシャルリスクマネジメント」という、他大学にはあまりない専門分野に重点をおきます。①は、昨今の日本経済の動向を考えると、特に「企業再生」「事業再生」という観点で、ほかに例を見ない教育内容であると自負しています。また②は、日本企業の国際化に伴って、海外進出する企業が、海外で直面する「プロジェクト・マネジメント」のノウハウを持つことの重要性を意識した教育内容です。③は、おそらく内外で、研究者と実務家の共同が急速に進み、もともと技術革新の行われている分野だと思われま

す。さらに実務経験者を多数教員として招き、研究重点ではなく、実業界などへの即戦力学生の養成を目指します。非常勤講師を含むと、合計四十名近くの実務家を講師等として招きます。失礼な言い方になるかもしれませんが、昔大学や大学院で学ばれた方には、隔世の感があるような実務と研究との融合した教育内容をお届けできると自負しています。あわせて、法学研究科と共同して「公共政策大学院」の設置も計画しています。この専門職大学院は、ここ最近東京大学、

一橋大学などに新設されたものと同種のものですが、やはり京都大学らしい特徴を持ったものを構想中です。もちろん、これら二つの大学院が密接な連携をとりあつて教育にあたり、経済学部・経済学研究科は、そのつなぎ目として重要な役割を果たすはず

です。いずれもこれから設置の審査を受けるわけで、現段階で詳細をお伝えできないのが残念ですが、近い将来に構想を披露させていただきます。同窓会各位にも、有形、無形のご協力をお願いできればと願っております。以上の方向へのシフトに関しては、研究者養成や基礎研究がおろそかになるのではないかと、いう心配を表明される方々があります。確かに、わが学部で教育を受けられた方々のご意見を聞いておきますと、卒業後、実務に役立つ教育内容よりは、哲学や人生観などの教養こそが、後の人生に血となり肉となったのだ、というご意見も少なくありません。この点については、次のようなご回答で満足いただけるでしょうか？京都大学を取り巻く雰囲気は、今も昔も全く変わっていません。近隣の社寺を訪れ、友と哲学を語り、のんびりと悠久の時に思いを馳せる風土で学ぶことは、いまでも十分できます。千年の都の重みは、今の学生にも、ものごとを根本的に考えるように誘います。それどころか、むしろ京都は、その古さゆえにこそ、もつとも新しいベンチャーなどを培ってきた土地です。基礎教育の重要性を決しておろそかにすることはないと、いうのは、大学の総意だと思

います。センター」の活動も順調に推移しています。このセンターの研究・教育活動を支援していただくために、昨年七月に発足した「上海センター協力会」も順調に成長しております。昨年から発行している「ニューズレター」は、会員のみなさまだけでなく、各方面から予想外のご好評をいただいております。この協力会の運営に当たっては、同窓会会員の有志の方々に多大のご尽力をいただいております。最後になりましたが、来年度設置を計画している二つの大学院は、近い将来、社会人教育を充実することになり、いろいろな意味で寄与できると考えております。現時点では具体化していませんが、東京、大阪にサテライトキャンパスを設けるとい

卒業生名簿の発行について

この度、京都大学経済学部・経済学研究科修士課程卒業生名簿を平成17年秋に発行する予定で準備を進めております。この名簿は、同窓会年会費を納入して頂いた方に配布することとなっております。なお、名簿の発行には、多額の経費を必要としますので、名簿に名刺広告を掲載し、その広告料を名簿発行の費用の一部に充当したいと思っておりますので、同封の申込書によりお申込み下さるようご協力の程、よろしくお願いたします。

京都大学経済学部同窓会事務局
住所：〒606-8501 京都市左京区吉田本町
TEL 075-753-3419 FAX 075-753-3490

なお、ご住所変更の折は、お知らせ下さいますようお願いいたします。

同窓会総会のご案内

平成17年度経済学部同窓会総会を下記の日時に開催いたしますので、何かとご多用のことと思いますが、会員諸氏お誘いあわせのうえご出席賜りますようご案内申し上げます。詳細につきましては、同封のご案内状を御参照下さい。

記
日時 平成17年10月22日(土) 15時～19時00分
場所 京都大学百周年時計台記念館

会費納入のお願い

平成17年度(17年4月～18年3月)の同窓会年会費5,000円を同封の払込用紙で、納入下さいますようお願い申し上げます。

近況報告

大学を離れて



京都大学名誉教授

高寺貞男
(平成五退官)

一九九三年に京都大学を退官した後、大阪経済大学で会計学を教えていたが、それも二〇〇三年に退職したので、現在は家の書斎で個人研究を続けています。

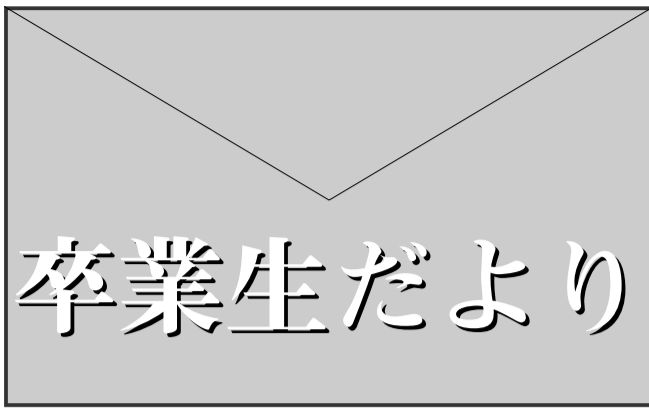
その昔大学を離れたら即座に研究に支障をきたしたに違いありませんが、現在では、パソコンを利用すれば、必要な文献を検索して入手することができます。

すので、研究上これという不都合は生じません。そんなわけで、大経大をやめた後も、在職中と同じように、平均して三ヶ月に一本の割合で研究論文を書き上げ、主として『大阪経大論集』に発表しています(ので、大経大のウェブサイトからダウンロードできます)が、最近では、限界への(接近というよりはむしろ)到達を自覚することしきりです。

ばなりません。そこで、今年に入ってから、店仕舞いを想定して、これまで収集してきた書籍を大学図書館への寄贈本、後進への分与本、古本屋への売却処分本、手許留保本へ分類整理する作業を進めています。そのための調査過程で、故きを温ねて、新しきを知る発見をしばしば経験しています。たとえば、マーシャル(一八九〇年)のいう「企業または経営(者)の利益(earnings of undertaking or management)」、『経済学原理』第一巻、一八九〇年、一四二ページ)とマルクス(一八九四年)のいう「企業

者利益(Unternehmergewinn)」、『資本論』第三巻、一八九四年(第二三章)はほぼ一〇〇年後にオールソン(一九九五年)のいう「異常(または残余)利益(abnormal (or residual) earnings)」に相当する(会計利益から資本の機会費用を控除した)概念としてマーシャル、特にマルクスがその当時行われていたパートナーシップ会計と株式会社会計の相違をつぶさに観察した結果を分配論の視点から帰納的に構成したものであるということを確認した次第です。

復運動が不要となる分だけ、運動不足が生ずるので、それを補うのに散歩が欠かせないが、その達成は困難である。また、講義をしなくなると、プレゼンテーション能力はもろろんのこと、対話能力も低下するが、その回復は友人、知人との電話のやりとりをいくら重ねても不可能に近い。



卒業生だより

時代劇が大好きで、その趣味が突然、自分の主軸となった時でもあった。今ではそれが生業となっている。

もともと文学に興味があったわけではない。現代社会やビジネスについて学びたいと思っていた。しかし、世はグローバル化、ハイスピード化しており、体力も知識も適応力もない私には、ついていけそうにない世界だった。それに比べ、架空の時代小説を書くという行為は、圧倒的に自由で楽しい。侍や忍者を暴れ回らせていると、心が解放され、夢中になれる。作品は、当時の先輩、後輩や友人達に読んでもらった。物語は大筋好評で、しかも彼らは、テレビっ子であった私に、小説の何たるかや文章の書き方について、アドバイスまでしてくれた。今でも感謝している。

うち、居合道部に入ったり、武術家の甲野善紀氏と出会って手裏剣術を稽古し始めたりした。八年前から、念願の柳生新陰流兵法(剣術)も習い出した。柳生十兵衛という剣士には、十代から深い興味を抱いており、デビュー作の主人公もこの十兵衛で、今年一月には、久しぶりにまた柳生モノを発表した。

三次元に、時間の経過も加えた四次元の攻防。それを自分の身体で表現するという「事理一体」の世界がある。逃げることもなく、真つ向から自分の筋を通しつつ、かつ相手にぶつからないという妙術が、今から四百年以上も前に発明されていたのだ。徳川家康や伊達政宗など、名だたる戦国武将も、この兵法には感服し、自ら習ったというが、うなずける。

「小よく大を制す」「攻防一体」「後に攻めて先に勝つ」といった剣の世界は、決して夢や伝説ではない。パワーの勝負とは異なる質なもの、古い武術の中には確実に残っている。それらを学び、応用することで、非力な私も、現代社会でのびのびと生きていきたいと思っている。

真つ暗闇の外からはいまままで経験したこともないようなけたたましい轟音が耳を打ちつける、これはもしやわが身もこの世の終わりの告げるとてもつもない地震が起きたのでは、あのときの恐怖はいまでもはつきり覚えています。そして奇跡的にけが一つなく助かったことで、翌日からは約六十日間に及ぶ激務の始まり...

平和の剣
・柳生新陰流

多田 容子
(平五卒)

学生時代に、バブル最終期の華やかな年に、私はチャンバラ小説を書き始めた。高校時代から

その後、いったん就職したが、八ヶ月で退社。本格的に作家を志した。九九年にデビューし、以来、年に長編一本というスピードペースながら、時代小説を書き続けている。剣豪小説を書く

「平和の剣」と称される。ただ、その剣術が、本当に相手を「切らない剣」だということとは、意外に知られていない。明らかに、攻撃的に切りかかってくる相手に対しても、こちらは切ることなく、その場を治める術が、創り上げられている。

私は、娯楽のための時代小説を書きながら、柳生新陰流の発想や術を伝えてゆくという役目も、同時に果たせたらと考えている。小説の中でも剣術の稽古風景、兵法の理論等を書き込んでいくが、講演などを行なう際には、いつも竹刀を携えていきつついつい実演まじりで柳生新陰流を語ってしまう。この兵法を習いに来る人も、近年増え続けている。

平和への願いというものが、変わりつつある時代なのかもしれない。「世の中をいい人ばかりにしよう」というような願望や号令ではなく、清濁あわせ呑

卒業後12年の
歳月を振り返り

寺澤真一
(平五卒)

一九九五年一月十七日午前五時四十分——どくんと一発の揺れが身体を襲い、すぐに目が覚める、何が起こったのか、もしかしして地震? と思ったとたん、にますます激しい突き上げがベッドを通じて身体を直撃、あれよあれよという間にベッドはトランポリン状態になり、身の回りの家財が落ちていく、そして

私は一九九三年に損害保険業界に就職し、入社二年目の冬に西宮での地震を経験しました。当時は大阪で火災保険・地震保険などの損害査定・保険金支払業務に携わっておりましたので、あの経験は私の会社生活の原点とも言えるものです。阪神地域の被災した保険契約者のもとへ駆けつけ、お見舞いの言葉をかけたあと、建物の基礎、柱、外壁、屋根を順につぶさに見ながら、損害程度をその場で即断、支払額を伝えるという、文字通り保険の真価を直接発揮する役割を果たしました。あのとき顔を合わせた人々の感謝と苦悩に満ちた表情、跡形もとどめない

無残な姿をさらす建物、対策本部での絶え間ない電話応対、一緒に働く社員や鑑定人との協力、すべてがまだつい先日経験したことのように脳裏に焼きついています。

私は入社以来十二年のキャリアのうち約半分はこの損害査定・支払業務に当たり、その後、生損保相互乗り入れの時代に入って新しく誕生した生保会社に出向して、現在に至るまで生命保険の支払査定業務に携わっています。冒頭に挙げた地震を代表に、風水災、住宅や工場の火災、自動車事故、マンシヨンの水濡れ、そして人の入院・死亡……日常生活のほとんどありとあらゆる「リスク」に直面する仕事を経験してきています。物の損害、損害賠償責任、人の疾病・負傷・死亡、そうした「保険事故」の事実を正確に把握し、約款・法律に基づきながら支払責任の有無を判断し、保険金という形で救済する。ある意味精神的にもっともつらい場面を経験しますが、保険会社の社員としては、ある意味「もつともやりがいのある仕事」でもあります。

この十年ほどの間に、歴史上まれに見る劇的な変化を経験しました。九六年の生損保相互乗り入れを皮切りに、九八年の保険料率自由化、そしてあいつぐ経営破たん、度重なる外資の参入……こうした数々の節目を通じてあつという間に業界再編が進み、保険業界の地図は入社当時と本当に様変わりしてしまいました。仕事の進め方も、電子メールやインターネット、携帯電話をだれもが当たり前のように駆使して日々膨大な情報や課題を背負いながら業務に当たるとなると、入社当時パソコンが「一課に一台」だったことがはるか遠い昔のように思えるほど劇的に変化しました。上述した保険の「真価」はいつの時代にも変わりませんが、市場や組織のあり方、人と人とのコミュニケーションのとり方が大きく変わる中で、日々その真価を發揮していくことの難しさを本当に実感させられます。こういふときこそ自分の「原点」を見詰め直す姿勢が大切だと思います。「忙しい」という漢字の示すとおり、現実に埋没すると「心を失い」、そのことを忘れてちですが、このような原稿を書いている中で改めて自分の心に思い起こさせられました。

同窓会会報に拙稿を寄せさせていただくにあたり、最後に心から思うことを一つ申し上げます。各界で活躍される皆さま方と世代を超えて交流できる機会が、いままで以上にいろいろな場面で持てることを望みます。私自身、ゼミのOB会にほぼ毎年参加して、そこで先生や仲間と触れ合う交流が自分自身の大きな糧になっていることを実感しています。他業界の第一線で活躍する仲間の話は自分の世界を大きく広げてくれるし、自分自身も仲間と伝えることで自分の位置をいつも相対化できます。こうした交流の輪は、いろいろなところでできていると思いますが、同窓会が、みんなが「ちょっと足を運んでみようか」と思えるような場になるよう、世代を超えて知恵を出し合ってください。と良いのではないのでしょうか。

を修了して、同年に産経新聞社に入社しました。現在はサンケイスポーツ編集局で中央競馬を担当しています。「仕事は競馬記者です」と言うと、よく「へえ、それは儲かるでしょう」と、うらやましがられますが、ハッキリ言ってそんなことはありません。今回は本欄をお借りして、私のまったく懲りない競馬記者生活の一部を紹介したいと思います。

競馬記者の一週間は、まずJRA（日本中央競馬会）のトレーニングセンターに行くことから始まります。東は茨城県の美浦村、西は滋賀県の栗東市にそれぞれ競走馬のトレーニングセンター（通称トレセン）があり、週中はそこで調教を見て、関係者に話を聞くという取材活動をしています。調教のピークは毎週水、木曜で、この二日間は記者やテレビ局の取材スタッフで、トレセンは非常に活気づきます。金、土曜は、取材の成果の見せ所・予想の日です。中央競馬は土、日曜に行われますので、金曜には土曜のレースを、土曜には日曜のレースの予想をします。ところで、ほとんどのスポーツ紙では、最低でも五人以上の記者が予想の印を打っています。全員が本命党の予想をしていては紙面的につまらないので、記者がそれぞれ工夫をして、個性を打ちだしています。私の場合は穴予想を売りにしているのですが、これがクセ者です。前述の「競馬記者（特に私の場合）は儲からない」ということも、このあたりに根拠があります。

高配当を狙うためには、人気が高すぎる馬を中心にすえなければなりません。もちろん、取材で得た材料の中に、そういった人気薄の馬を推す材料（たとえば調教の動きが格段によく

さないうのですが、人気馬に比べれば、人気薄の馬の強調材料など、たかがしれています。それでもジツクリと考えているうちに、本当にその穴馬が来てしまいいそうな気がしてくるのです。「本当に予想通りになったら、すごい配当になるに違いない！」と胸が高鳴ってきます。実際にそうなる確率は格段に低いにもかかわらず……。そして、実際に予想通りの馬券を買ってしまうのです。

もうお分かりでしょうか。競馬記者（くどいようですが、特に私の場合）というのは、この「勉強代」が非常に高くつくのです。ならばやめておけばいいではないか、という声が聞こえてきそうですが、そう簡単にはいきません。予想通りにレースが展開し、決着したときの快感は、何者にも変えがたいものがあります。大抵は日曜の夕方、後悔の波にモマレながらメインレースの原稿を書くのですが、同時に「来週こそ、またあの快感を……」と、新たなチャレンジ精神が頭をもたげてくるのです。一種の中毒です。もうどうしようもありません。

最後にになりましたが、今年はディープリンパクトという歴史に名を残すであろう名馬が中央競馬に現れました。競馬はギャンブルであるのと同時に、馬と人が織りなすエキサイティングなプロスポーツであることを思い出させてくれる、素晴らしいサラブレッドです。すでにダービー、皐月賞の二冠を制し、この原稿が載るころには札幌競馬場で秋に向けて充電中だと思えます。秋は神戸新聞杯というレースから、実戦に復帰します。みなさまお暇があれば、ぜひとも競馬場に足を運んで、その異次元の走りを体感してみてください。

京都大学を出てからすぐ、「戦う」という言葉を覚えました。私の周りのみでの俗語なのか、広く一般に使うのかは分かりませんが（文例…上司と戦う）。その意味は、喧嘩するでも反抗するでもなく、理を尽くして自分の考えを伝え、相手を説得することです。とはいえ、私の拙いプレゼンでは、相手は簡単に説得されてくれることはなく、連戦連敗、悔しく情けない気持ちを感じさせられるばかりです。

さて、私は、二〇〇二年春に大学院経済学研究所を修了して財務省に入省し、理財局財政投融資総括課にて財政投融資制度の企画・立案、財政投融資計画策定などに関する部局内の取りまとめ・司令塔役（の下っ端）を経て、現在（二〇〇五年六月時点）は、仙台国税局で、国税調査官として東北地方の大企業に対する税務調査に携わっています。行政府における意思決定は、決裁という形式をもつてなされます。基本的な流れとしては、まず、末席の事務官が決裁文書を起草し、直属の上司に承認の意のハンコを押してもらいます。その案が複数の係の所掌に関連するものであれば、関係諸係にもハンコをもらいます。そして最終的に部局の長の承認が得られれば、末席事務官の案が部局の意思となります。当然、承認した者には責任が伴い、ハンコをもらう際には、その案の趣旨をはじめ文章のていをはまで、タテヨコナメ（こ）から斬られても倒れない説明が求められます。ここでは、みな、「論理」という

武器を手に戦います。敵は、上司・他部局・他省庁・調査法人。もちろん、敵も、論理という武器を手にしています。法令、経済理論、過去の事例・裁判例、諸外国の制度、財務大臣・総理大臣国会答弁、相手の利害状況などありとあらゆる情報を基に、勝てる武器を構築し磨き上げ、相手を論破・説得する。己の矛が相手の盾を貫けば勝ちです。学問・閥閥・声のでかさ・人のよさなどは、あまり強い武器にはなっていないように見受けられます。勝つのに必要なのは、専ら知恵の質と量。物量作戦はやはり古今東西戦争の王道なのでしょう。歩三枚で戦うよりも、飛車角金銀で戦う方が強い。では、飛車角金銀を手に入れるには？ 兎にも角にも、勉強しなさい。逆に言えば、勉強すれば飛車角金銀桂香を手に入れられ、必ず勝てる、誰が相手であつても勝てる、ということなのです。

このように、勝敗の行方が絶対的な知恵の質と量に委ねられてしまうので、知恵さえあれば誰が相手でも勝てるはずだという希望を胸に抱きながら仕事をしている毎日です……と勇ましく書きたいところですが、現実には勝たずに巡り会うことはなかなか希なことで、世の中にはばらばらに強いヤツがたくさんいるものだと、負け戦ながら敵の強さに感心することしきりです。

先日は、とある会社への税務調査において法人税の課税所得の計算に関して問題点を発見しました。同様の事例で真面目にきちっと申告している会社もあるのだから、課税の公平のためには見逃すわけにはいかないと私は考えるものの、経験豊富な上司は必ずしもそう考えていないようです。絶対に負けられない戦いがそこにある……そんななおおげさな、とひとりごちな

同九年に経済学研究所修士課程

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

野下俊晴

私の研究



京都大学大学院経済学研究科教授
古川 顕

私は一九九四年四月に経済学部にて赴任して以来、毎年、金融論を講義しています。当然のこととはいえ、私の学生時代とは違って、金融論の内容も大きく変わってきています。以前は、貨幣とは何か、利子とは何かといった本質的な問題が講義されたり、金融の制度論が大きな比重を占める一方、金融プロパーの理論と言えば、信用創造の理論があるくらいで、あとはマクロ経済学（国民所得論）の授業に終始した、というのが全国の大学の平均的な姿だったのではないのでしょうか。

しかし、ここ二十年ほどの間に、情報の経済学や不完備契約の理論、企業金融の理論など新しい経済学の理論的成果を受けて、金融論の理論的基盤も格段に強固になりました。バブル崩壊以降の金融システムの不安定化や相次ぐ金融機関の合併・統合、デリバティブをはじめとする新しい金融商品・サービスの登場などによっても、金融論の対象とする「風景」はずいぶんと変化しています。金融論はめざましい発展を遂げつつありますが、それにもかかわらず、私には金融の基本的問題がなおざ

りにもかかわらず、それをはるかに超えて三十兆円超にまで日銀当座預金残高を増やし続けてきた政策に何の意味があるのかという疑問です。「馬を水飲み場に連れて行くことはできるが、馬に水を飲ませることはできない」というたとえがありますが、金融機関が「いらぬ」という資金を、さまざまな問題が表面化している中で、なにゆえ無理やり供給し続けなければならぬのかという疑問であります。ゼロ金利の制約、すなわちコールレートが0%のもとで、日銀当座預金残高を増加させることとどのような経済的効果が期待できるのでしょうか。これまで一般に言われてきたのは、大量の流動性を供給し続けた場合、金融機関や企業などの経済主体はいつかは飽和状態に到達し、これによって相対的にリスクの高い資産の保有を増加させるために経済活動に拡大的效果が生じるといえるのです。たとえば、金融機関の企業に対する貸出供給が増加すれば経済活動にプラスに作用するし、株式やドル建て資産などへの投資が増加すれば、株価の上昇や円安の進展などを通じてやはり経済活動が活発化することが期待できるというものです。こうした効果は通常、アセット・リアリゼーション効果ないしはポートフォリオ・リバランス効果と呼ばれています。この考え方は、経済がたとえゼロ金利制約に直面したと

しても、金融の量的緩和という形で政策発動の余地が残されていると主張するわけですが、現実のデータはアセット・リアリゼーション効果を否定しています。量的緩和政策に賛成するにせよ反対するにせよ、ほとんどすべての議論に共通しているのは、そのトランスミッション・メカニズム（波及経路）がどのようなものであり、また準備（日銀当座預金）供給との関係で、短期金融市場金利の中核であるコールレートがどのようなメカニズムで決定されるのかといった根本的な問題を回避していることです。日銀自身も、これまでまったく「説明責任」を果たすことなく量的緩和を続け、市場機能を封殺し多くの問題を抱えながら、自ら設定した当座預金残高の目標枠を維持するという自縄自縛に陥っています。

このほかにも、金融の基本的なメカニズムを不問にしたり、それを明確に説明できないまま政策論議に走る事例はいくらでもあります。例えば、バブル崩壊以降の長期にわたる景気低迷のもとで、「デフレは貨幣的現象である」との議論が多くの経済学者やエコノミストによって呪文のように唱えられ、マネーサプライの増加を図るような様々な政策が種々提案されました。量的金融緩和政策もそのひとつです。確かに、バブル崩壊以降、マネーサプライの伸び率が大きく鈍化したことは事実ですが、一方で金融緩和を反映してハイパワード・マネー（マネタリーベース）の伸び率は近年未曾有の高水準に達しています。なにゆえ、大幅な金融緩和にもかかわらずマネーサプライの伸び率が低いのかという点についても、結局は、一国の貨幣量がどのようなメカニズムで決定されるのかという基本的な問題を十分に理解しないと、不毛な議論に陥ってしまいます。

数年前に情報の経済学への貢献でノーベル経済学賞を受賞したJ・ステイグリッツ教授は、その受賞直後に、バブル崩壊以降の低迷する日本経済再生の処方箋として、インフレ目標を設定すること、そしてその目標のインフレ率を達成するまで紙幣（日銀券）を増発することの二つを提案したことがあります。インフレ目標の設定はともかく（筆者は反対ですが）、後者についてはまったくナンセンスとしか言いようがありません。ステイグリッツ教授の提案は、政策当局（日銀）が自由に紙幣の発行量をコントロールできると考えること、紙幣の増発が金融緩和効果をもたらすとみなしていること、の二点において根本的に間違っています。日銀券の増発は、他の条件が一定ならば、金融の逼迫要因です。これは日本の資金需給の根幹にかかわる重要なポイントであり、マーケットの“常識”であります。しかし、多くの金融を専門とする経済学者ですら、このことに無知なのは驚くばかりです。

経済学部を卒業して以来四十年近くにわたって金融の分野を中心に勉強してきましたが、基本的なことほど難しいというのが私の偽らざる感想です。現在は、マクロ経済学の最も重要で中心的なトピックであるマネー・ビューとクレジット・ビューと呼ばれる代替的な見解の対立に関する論争をフォローしながら、資産価格の変動や企業のバランシートの変化が経済活動に及ぼす影響について（学説史を含めて）理論的に、かつ実証的に研究を進めています。この論争も畢竟、「貨幣」と「信用」のいずれが、どのようなメカニズムを通じて、経済活動により大きなインパクトを与えるのかという経済学の根本的な問題に連なっています。

夏目漱石の俳句に、「どっしりと尻を据えたるかぼちゃかな」という句があります。俳句としてはあまり上等とは言えませんが、私としてはこの一句が示唆するように、今後ともどっしりと腰を据え、「時流」に流されることなく「自流」を貫き、金融の本質をより深く追求していきたいと考えています。

量的金融緩和政策というのは、日本銀行が二〇〇一年三月、デフレスパイラルの懸念を払拭し、かつ金融システム不安を抑止する観点から、金融政策の操作目標を無担保コールレート（オーバーナイト物）から日銀当座預金の残高に変更した政策ですが、これが導入されてから既に四年以上が経過します。この間、日銀の資金供給オペに金融機関側が予定額まで応じないケース（札割れ）がしばしば発生したり、コール市場の縮小と機能麻痺が生じたり、短期金融市場でマイナス金利が常態化するなど、金融調節上の様々な問題点が表面化したことはよく知られています。また金融システムが安定し、デフレスパイラル懸念がほぼ解消した現在、いわゆる量的緩和政策の「出口」問題が活発に議論されていることも周知の通りです。

私はかねがね、量的金融緩和政策に関して根本的な疑問を抱いています。それは、五兆円もあれば所要準備残高を満たせる

にもかかわらず、それをはるかに超えて三十兆円超にまで日銀当座預金残高を増やし続けてきた政策に何の意味があるのかという疑問です。「馬を水飲み場に連れて行くことはできるが、馬に水を飲ませることはできない」というたとえがありますが、金融機関が「いらぬ」という資金を、さまざまな問題が表面化している中で、なにゆえ無理やり供給し続けなければならぬのかという疑問であります。ゼロ金利の制約、すなわちコールレートが0%のもとで、日銀当座預金残高を増加させることとどのような経済的効果が期待できるのでしょうか。これまで一般に言われてきたのは、大量の流動性を供給し続けた場合、金融機関や企業などの経済主体はいつかは飽和状態に到達し、これによって相対的にリスクの高い資産の保有を増加させるために経済活動に拡大的效果が生じるといえるのです。たとえば、金融機関の企業に対する貸出供給が増加すれば経済活動にプラスに作用するし、株式やドル建て資産などへの投資が増加すれば、株価の上昇や円安の進展などを通じてやはり経済活動が活発化することが期待できるというものです。こうした効果は通常、アセット・リアリゼーション効果ないしはポートフォリオ・リバランス効果と呼ばれています。この考え方は、経済がたとえゼロ金利制約に直面したと

しても、金融の量的緩和という形で政策発動の余地が残されていると主張するわけですが、現実のデータはアセット・リアリゼーション効果を否定しています。量的緩和政策に賛成するにせよ反対するにせよ、ほとんどすべての議論に共通しているのは、そのトランスミッション・メカニズム（波及経路）がどのようなものであり、また準備（日銀当座預金）供給との関係で、短期金融市場金利の中核であるコールレートがどのようなメカニズムで決定されるのかといった根本的な問題を回避していることです。日銀自身も、これまでまったく「説明責任」を果たすことなく量的緩和を続け、市場機能を封殺し多くの問題を抱えながら、自ら設定した当座預金残高の目標枠を維持するという自縄自縛に陥っています。

このほかにも、金融の基本的なメカニズムを不問にしたり、それを明確に説明できないまま政策論議に走る事例はいくらでもあります。例えば、バブル崩壊以降の長期にわたる景気低迷のもとで、「デフレは貨幣的現象である」との議論が多くの経済学者やエコノミストによって呪文のように唱えられ、マネーサプライの増加を図るような様々な政策が種々提案されました。量的金融緩和政策もそのひとつです。確かに、バブル崩壊以降、マネーサプライの伸び率が大きく鈍化したことは事実ですが、一方で金融緩和を反映してハイパワード・マネー（マネタリーベース）の伸び率は近年未曾有の高水準に達しています。なにゆえ、大幅な金融緩和にもかかわらずマネーサプライの伸び率が低いのかという点についても、結局は、一国の貨幣量がどのようなメカニズムで決定されるのかという基本的な問題を十分に理解しないと、不毛な議論に陥ってしまいます。

数年前に情報の経済学への貢献でノーベル経済学賞を受賞したJ・ステイグリッツ教授は、その受賞直後に、バブル崩壊以降の低迷する日本経済再生の処方箋として、インフレ目標を設定すること、そしてその目標のインフレ率を達成するまで紙幣（日銀券）を増発することの二つを提案したことがあります。インフレ目標の設定はともかく（筆者は反対ですが）、後者についてはまったくナンセンスとしか言いようがありません。ステイグリッツ教授の提案は、政策当局（日銀）が自由に紙幣の発行量をコントロールできると考えること、紙幣の増発が金融緩和効果をもたらすとみなしていること、の二点において根本的に間違っています。日銀券の増発は、他の条件が一定ならば、金融の逼迫要因です。これは日本の資金需給の根幹にかかわる重要なポイントであり、マーケットの“常識”であります。しかし、多くの金融を専門とする経済学者ですら、このことに無知なのは驚くばかりです。

経済学部を卒業して以来四十年近くにわたって金融の分野を中心に勉強してきましたが、基本的なことほど難しいというのが私の偽らざる感想です。現在は、マクロ経済学の最も重要で中心的なトピックであるマネー・ビューとクレジット・ビューと呼ばれる代替的な見解の対立に関する論争をフォローしながら、資産価格の変動や企業のバランシートの変化が経済活動に及ぼす影響について（学説史を含めて）理論的に、かつ実証的に研究を進めています。この論争も畢竟、「貨幣」と「信用」のいずれが、どのようなメカニズムを通じて、経済活動により大きなインパクトを与えるのかという経済学の根本的な問題に連なっています。

夏目漱石の俳句に、「どっしりと尻を据えたるかぼちゃかな」という句があります。俳句としてはあまり上等とは言えませんが、私としてはこの一句が示唆するように、今後ともどっしりと腰を据え、「時流」に流されることなく「自流」を貫き、金融の本質をより深く追求していきたいと考えています。

出版案内

『会計改革とリスク社会』

岩波書店二〇〇五年二月

京都大学大学院経済学研究科助教授

澤邊 紀生



会計は企業活動を写す鏡であるといわれる。しかし現代の経済社会改革を俯瞰することで明白となるのは、会計の能動的な性格である。会計は企業活動や社会のあり方を反映するばかりでなく、企業活動や社会のあり方を変えていつている。会計改

革が企業や社会をどのような方向に導こうとしているのか、会計が現実に及ぼす力を理解することがこの著作の執筆動機であった。本書は、三部構成になっている。第一部では、日本における近年の金融制度改革を舞台とし

て、会計の能動的な役割が描かれる。具体的にはメインバンク・システムやコーポレート・ガバナンスの変容と会計がどのように関係しているのかが扱われている。日本における会計制度改革を、日本国内の問題として理解することができなくなった背景にはグローバル化の大きな流れが存在する。

このグローバル化の流れを会計基準設定構造の変化として整理したのが第二部である。会計基準設定構造に生じた変化を手がかりに、これまでの国際化とは明確に異なる会計のグローバル化の展望が描かれる。

第三部では、国際会計基準委員会(現国際会計基準審議会)を中心とした会計基準設定活動

を素材に、グローバル社会における会計の性格と役割を考察している。ここでのキーワードはリスクである。リスクは、既に生じた過去の事象ではなく、これから生じるかも知れない将来の事柄に関わる問題であるにもかかわらず、経済活動を客観的に描写することが求められる会計は、リスクを理論的に定義することでこの課題に答えようとする。いったんリスクが定義されると、そのリスクに対応すべく企業は行動する。このようにして、会計は、また会計を基礎づける理論は、現実に規範的影響力を有することになる。

しつぽが胴体を振り回してしまっているといえ、金融と「実物経済」の転倒した関係のこと

を素材に、グローバル社会における会計の性格と役割を考察している。ここでのキーワードはリスクである。リスクは、既に生じた過去の事象ではなく、これから生じるかも知れない将来の事柄に関わる問題であるにもかかわらず、経済活動を客観的に描写することが求められる会計は、リスクを理論的に定義することでこの課題に答えようとする。いったんリスクが定義されると、そのリスクに対応すべく企業は行動する。このようにして、会計は、また会計を基礎づける理論は、現実に規範的影響力を有することになる。

だが、会計と「実体経済」の最近の関係はまるで影踏みのようなのである。実体経済の影である会計を押さえることがゲームの基本ルールになってしまっている。現場から離れたところから経済活動をコントロールするために、様々な局面において会計ルールの変更が近年行われてきた。しかもその変更は、ローカルな事情を反映してボトムアップに行われるのではなく、グローバルな文脈から現



新任教官の紹介



寄附講座客員教授

川北 英隆

就任年月日

平成十七年四月一日

担当講義科目

資本市場論、証券投資分析

出生地・生年月日

奈良県

一九五〇年七月二十七日

感想・抱負等

経済学部を卒業して三十一年が経過した。その間、会社員生活と数年の大学教授の経験を積んだ。この社会生活の中で、大学時代の何が役に立ったのか。自分で考える習慣を身につけたことだろう。もちろん、数人の

先生のすばらしい講義に出会ったことも指摘すべきだが、因果がめぐり、同じ大学の大学院で教えることが決まったとき、「すばらしい講義を要求されても無理だが、自分で考えることを教えるのは可能かもしれない」と思った。現在の大学構内は平和そのもの、担当する証券市場の講義は淡々と進んでいる。一方、現実の証券市場では古き良き時代の著名企業が破綻したり、経営権を脅かされたりしている。その緊張から、真剣に考える経営と、知恵が生まれつつある。

そんな現実社会を俯瞰するためにも、暇があれば大学から少し



寄附講座客員教授

濱田 康行

就任年月日

平成十七年四月一日

担当講義科目

ベンチャーキャピタル経営論

出生地・生年月日

北海道

一九四八年三月十二日

感想・抱負等

この度、寄附講座の客員教授に就任しました。私の勤務の本拠地は北海道大学です。多くの方が、なぜ、遠くの大学から

といぶかしく思われることでしょう。そこで、この間の事情を説明して、「自己紹介」に代えたいと存じます。

私の担当する講義の名称はベンチャーキャピタル経営論です。はあるが成長の見込める企業に資金提供する投資会社で、イギリスに源流がありアメリカで戦後に発達した金融・投資業です。日本ではずっと遅れて一九七〇

年代に始まりましたが、その第一号が京都に設立されました。当時の京都の財界の協力で発足したのです。その後、何度かの曲折を経て日本のベンチャーキャピタルの投資残高は約一兆円となり、数年前に協会も設立され、金融界のひとつの業態として認識されるに至っています。

この度、業界のトップ企業のひとつであるUFJキャピタルが、日本のベンチャーキャピタルの発祥の地にふさわしい研究

教育拠点を、名門の京都大学に設置したい」ということで、今回の寄附講座が実現しました。私は、この五年間当大学に当該関係科目の非常勤講師として勤めていた関係で、客員教授の御依頼を受けることになりました。微力ですが、二年間で講座の基礎作りをし、京都大学の財産としてお返ししたいと考えております。

(現職：北海道大学経済学部教授)



助教授

久野 秀二

就任年月日

平成十七年三月十六日

担当講義科目

学部／農業経済論(平成十八年度より)、経済

学 部／農業経済論(平成十八年度より)、経済

英語

大学院／国際農業分析、経済

学古典研究

出生地・生年月日

大阪府

一九六八年六月十六日
感想・抱負等

本学経済学部、経済学研究科を経て、一九九五年から約十年間、北海道大学農学研究科で教育・研究に携わってきました。専門は「農業・食料の政治経済学」で、とくに農業ハイテク・ロジックをとりまく政治・経済・社会の問題を研究対象としています。

最後の二年間を客員研究員として過ごしたオランダ・ワーヘニンゲン大学を含め、前任地では自然科学から社会科学まで、遺伝子から生態系まで、ミクロ経済学から政治経済学や社会学まで、多様な専門分野に分かれていながらも、農業・食料という共通基盤に立つて集団で教育・

研究にあたることができました。本研究科では自分の限られた専門性が「農業経済学」さらには「農業」を代表することになるため、その困難と重責をひしと感じています。もっとも、本研究

科は多様性の共存を貴重な遺産として発展してきたと思えますので、あまり萎縮することなく、自信をもって教育・研究にあたっていきたくと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

寄附講座助教授

田中敬一



就任年月日

平成十七年四月一日

担当講義科目

学部／経済数学1、
経済数学2

大学院／ファイナンス工学特論

出生地・生年月日

愛知県

一九六五年一月二十一日

感想・抱負等

ここ京都大学で教鞭を取る機会に恵まれたことは望外の喜びです。

刺激に満ち溢れた先生方と、良い意味でも悪い意味でも真面目な学生達とともに切磋琢磨して学問に励みたいと考えております。

私は、大学院生等の一部の時期を除けば、これまで長く金融機関等に勤務しておりました。

金融・証券業界から学者への転進組はファイナンスの認知とともに増加していますが、いわゆる実務家教員としての教育上の役割を果たされているケースが多いようです。私も若輩ながら研究・教育両面で本学および学会へ貢献できるよう努めたいと思います。

(現職：日本銀行金融研究所
リサーチアシソシエイト)



寄附講座助教授

芝田隆志

就任年月日

平成十七年四月一日

担当講義科目

ファイナンス工学、
証券投資論

出生地・生年月日

茨城県

一九七〇年十二月九日

感想・抱負等

今年四月に本学部に着任しました。このたび、母校に赴任することができ、大変光栄に思われます。専門分野はファイナンス工学です。ファイナンス工学と

は工学的アプローチを用いた金融に関する研究分野で、主に不確実性に起因するリスクを分析の対象としております。このような新しい研究分野においても京都大学経済学部から優秀な人材を輩出することにより、本学部そして社会に貢献できるよう邁進したいと考えております。

(現職：横浜国立大学大学院
国際社会科学専任講師)

各支部からの便り

東京支部

第十五回記念総会

―尾池総長ご講演に感謝―

東京支部の第十五回記念総会は、三月三日午後六時京都大学総長尾池和夫先生の講演でスタートした。「京大と地震と俳句」という演題で、事前にご専門の地震予知、ご趣味の俳句、それに京大の現状も、と欲張りなお願いをしたところ、快くお引き受けいただき、ご自身で編集された(我々からすれば凄いことな

のです)パワーポイントを操作されながら、ユーモアを交えて極めてわかりやすくお話された。三テーマを関連づけながら、

すべてをカバーされた。独立法人化後の昨年十二月に就任されたとはいえ、尾池総長の旺盛なサービス精神には、お話の内容と共に出席者一同深く感銘した次第である。しかも、ご多忙中にも拘らず懇親会の最後までお付き合いました。記念総会を一層実りあるものにする事が出来た。あらためてお礼を申し上げます。

大学本部に全学同窓会の準備室ができたことでもあり、今回からインフォーマルに他学部OBにもお声をかけてみることにした。結果としては数名にとどまったが、今後も経済懇話会を

含

めてトライしてゆく考えである。また、学部の先生方にゼミ卒業生に働きかけていただいたこともあって、新卒者が数名出席された。

同窓会活動の維持、拡大のためには、若い人達の参加が不可欠であり、本部が作成される卒業生名簿にどうやって収めてゆか、積極的な検討をお願いしたい。

今回は総長講演ということもあって、出席者は二四〇名に達し盛会となった。本部から出席いただいた西村学部長ほか諸先

大阪支部

平成十六年十月十三日(水)に、毎年恒例の大阪支部の理事・幹事会が、大阪市内の関電会館において開催された。当日は辻井

昭雄(昭三三卒)支部長の司会進行により同窓会の活動状況報告、収支決算等の議案の審議の後、企業、団体の異動等による

生、出席会員の皆さん、事務局の皆さん、それから「京大グッズ」販売に当たってご配慮いただいた生協の方々、会場の東京會館の方々に對して、心からお礼申し上げます。

今回の総会にて支部長、副支部長が交替した。安居祥策氏(昭三三卒)、宗雪雅幸氏(昭三四卒)のご尽力に對して感謝申し上げます。西澤宏繁氏(昭三六卒)、岡野徹氏(昭三八卒)のご指導のもと、東京支部の発展に努めることと

(合田 隆年(昭三五卒))

理事・幹事の一部変更を提案、ご承認頂いた。その後平成十七年一月二十八日(金)ガスビル食堂において開催予定の同窓会大阪支部総会の計画概要につき、ご了解を頂戴した。また母校、京都大学経済学部の現況並びに同窓会の活動状況については、ご出席頂いた西村周三経済学部長および櫻田忠衛常務理事からご報告を頂戴した。

その後、京都大学経済学部同窓会の理事会・総会が平成十六年十月二十三日(土)に、京都大学百周年時計台記念館にて開催され、大阪支部からも辻井支部長他多数参加された。当日の議案中、支部関連の役員変更としては辻井支部長が引き続き同窓会本部の副会長に就任、また新たに小山禎三(昭三三卒)理事が本部常務理事に、大森経徳(昭三三卒)副支部長、河合同二(昭三九卒)副支部長がそれぞれ

本部理事にご就任頂く事が承認された。

また平成十七年一月二十八日(金)に第十四回大阪支総会および懇親会が大阪市内のガスビル食堂にて開催され、およそ百二十名の同窓生が出席された。第一部の支部総会では、吉川勝久幹事(昭四三卒)の司会で始まり、来賓の大学の先生方をご紹介した後、辻井支部長より、「社会経済が大きな転換期にあり、大学についても、独立行政法人移行等課題も山積している。企業、団体も個人もサバイバルをかけて切磋琢磨の時代である。こういった機会を活用して互いに情報交換し、それぞれが属する組織に寄与貢献できるような人的ネットワークを構築し、将来に向けてプラスとなるような楽しい有意義な総会としたい。」と挨拶を行った。続いて西村経済学部長から本学経済学部の近

況についてご報告を頂戴し、櫻田同窓会常務理事から同窓会活動の状況についてご説明を頂いた。最後に支部総会の特別講演として、西村経済学部部長から「健康・医療産業の現状と将来」について講演を頂戴した。わが国の少子高齢化が進む中、健康保険や医療制度、介護をはじめとする福祉のあり方も、大きな転換期を迎えている。企業人としても一社会人としても興味深く、また知らねばならないテーマであり、多くの参加者にとっ

名古屋支部

名古屋支部は愛知・岐阜・三重在住の卒業生によって構成されています。

支部の活動としては、平成三年に第一回の支部総会を開催後、平成五年から七年にかけて毎年支部総会を開催してきました。

その後途切れていましたが、昨年九月ぶりに第五回の総会を開くことができました。

総会前々日には、超大型の台風が当日に名古屋を直撃する可能性が高い旨の天気予報があり、会の延期も含めて検討するなど大変気をもみましたが、台風の進路の変化やスピードアップにより無事開催することができました。

平成十六年十月二十一日、名鉄ニューグランドホテルにて四九名の会員の皆さんと大学から四名の先生のご出席を得た会は、「総会」、「講演会」、「親睦会」の三部構成で進められました。

て、非常に意義深いテーマでもあり、出席者全員が熱心に聴講され、その後の質問も活発であった。

第二部の支部懇親会では、辻井支部長の乾杯で幕開けを行い、以下来賓として経済学部の各教授からご挨拶いただいた他、諸先輩OBからご挨拶を頂き、同窓会活動に向けて理解を深めるとともに、活発に懇談を行い、懇親を深めつつ、互いに再会を約して散会した。

(林 信 (昭五九卒))

その後、新理事・新幹事のご紹介などを経て閉会となりました。

講演会では、わざわざ京都からお越しいただいた塩地洋経済学研究所教授から「中国自動車流通の現状と課題」のテーマで大変興味深い講演をいただき、会員の皆さんからも活発な質問があり有意義な講演会となりました。

その後の親睦会は、高井新副支部長の乾杯のご発声で幕開けを行い、和やかな雰囲気の中、会場のいたるところで旧交を温める会員の皆さんの姿が見られました。

加藤新副支部長の締めのご挨拶でお開きとなりましたが、連れ立って次の場へ移動される方、再会を約束される方も多数みえました。

最後にになりましたが、現在、愛知県では九月二十五日まで「愛・地球博」が開催されています。この会報が発行される頃には、

残りの会期もわずかとなっていきますが、お近くの方はもとより遠方の方も、今年開港した中部国際空港(セントレア)

神戸支部(神戸同好クラブ)

京都大学経済学部同窓会神戸支部は、経済学部同窓会が昭和三五年「同好クラブ」として発足したのを受け、昭和三六年三月、同好クラブ神戸支部として発足しました。その後、大学紛争等で経済学部同窓会が中断中も、「神戸同好クラブ」として、活動を続けて参りました。平成元年に同窓会再開後は、同窓会神戸支部として、現在毎年一回懇親会を開催しております。昨

年は九月八日、西村屋和味旬彩で開催いたしました。今回の会合は、本部より森棟公夫教授の御参加を頂き、二十四名で開催いたしました。

神戸支部は今年支部長が交代

をご利用いただき是非、来名いただき万博をお楽しみいただきたいと思います。

(澤田 信也 (昭五五卒))

いたしました。門田研造氏が、JFEスチールが神戸から離れるため退任を申し出られ、その後任に板東慧氏(昭和三二年卒大阪産業大学客員教授)を選任致しました。板東氏は大阪に勤務なさっていますが、自宅が神戸で当地の審議会等に多く関係されており、永く神戸支部にご出席頂いております。また、理事に家次恒氏(昭和四八年卒シスメックス社長)を新たに選任致しました。

当地の同窓の方で同窓会に参加御希望の方はご連絡頂ければ幸いです。

(小野昭夫 (昭四八卒))

愛媛支部

愛媛支部は、発足以来四〇余年、会員数四〇名前後で安定推移しています。年一回、総会(懇親会)を開催し、会員のどなたかに、時宜に合ったテーマで、三〇分ほどレクチャーをお願いすることを、恒例としています。

年会費は三千円、別に総会(懇親会)出席者の実費負担(五千円程度)により運営しています。以下、昨年度の支部活動を報告します。

二、下期総会(懇親会)

平成十七年一月十五日(土)午後五時より、伊予銀行松山保養所。出席は十五名。四国電力が南予・伊方原子力発電所に、プルサーマル導入計画を打ち上げ推進しつつある折りでもあり、張貞旭 松山大学助教授から「なぜ、いまプルサーマルなのか」のテーマで、環境経済学の視点も交えて、プルサーマルの問題点についてレクチャー、おおいに蒙を啓らきました。本部よりご出席の本山美彦教授から、本部報告の後、旬の河豚料理コースを満喫・歓談、八時すぎ散会。二次会には、地元大学の、本山教授の旧知の先生なども参加、大いに盛り上がりしました。

九州北部支部

1. 会員数

百四十名程度
地元企業・地方自治体等への就職者を中心に、東京・大阪に本社を置く企業の九州北部地区勤務者等により構成。

2. 役員氏名

支部長：鎌田直貞 (昭和三三年卒 九州電力(株)代表取締役会長)
理事：黒瀬和男 (昭和三十年卒 西日本総合ドリンク(株)取締役社長)
// 藤永憲一 (昭和四八年卒 九州電力(株)経営企画室長)

愛媛支部は小粒な組織ではありませんが、当地出身の方、また過去に当地を任地としていた方で、県外に移り住まれている方も、会員として遠路参加いただいております。また他学部にも、同窓会がないこともあり、法学部などから数名のオブ参加を得て、元気に活動を続けています。

若い人の新規加入も偶にはあるとはいえ、会員高齢化の進行は、如何ともしがたく、先行きの運営は憂慮されます。ひとりでも多くの卒業生が、地元の企業や大学に来てくれることを、切に期待しています。

(渡部 晃夫 (昭三二卒))

開催しており、今年度は五月十九日(木)にホテルオークラ福岡において開催し、初参加の四名を含め二十五名が出席した。

鎌田支部長からの挨拶に引き続き、ゲスト参加いただいた澤邊紀生助教授から独立行政法人化後の大学運営など、大学の近況についてご紹介いただいた。

その後は、恒例になっている参加者全員による自己紹介を行い、所属ゼミや学生時代のサークル活動、住んでいた下宿等々、京都談義に花を咲かせ、世代を超えて懇親を深めた。なお、総会では前支部長で九州北部支部の発展にご尽力された山田松華理事(昭和十九年卒業)が三月十二日に永眠されたことが報告され、参加

3. 総会

例年、五月に年一回の総会を

者一同が故人の意を引き継ぎ、同窓会の一層の発展を期することを誓った。

4. 役員会

・総会のほか、春・秋・年末年始などの年二〜三回役員会・

懇親会を開催し、大学や同窓会本部の状況などについての情報交換

5. その他

・同窓会本部のご協力により、これまで事務局で把握できて



九州北部支部総会

いかなかった同窓生の情報を提供いただいた。この結果、十六年度以降、四〜五名ずつ新たに参加いただき、同窓会の活性化につながっている。今後とも同窓会本部と連携を図り、同窓会の発展に努めたい。(田中剛弘 平成三卒)

九州南部支部

九州南部支部は、熊本・宮崎・鹿児島県の三県の同窓生で構成してあり、現在の会員は約八十名。これまで、毎年支部総会を開催してあり、平成十七年度は七月三十日(土)に鹿児島東急インホテルで開催を予定しています。今回の支部総会では、会員にメイン・スピーカーをお願

いし、地域における仕事や社会のことを話していただく予定です。スピーカーは、地域から他の地域へ、さらに外国へと事業の展開を模索している(株)「談

のリーダー丸野(梅田) 香代子氏(昭五四卒)です。

九州南部支部役員氏名

- 支部長：瀬地山 敏 (昭三五卒、鹿児島県)
- 理事：宮里 泰夫 (昭十七卒、宮崎県)
- 理事：丸元 貞夫 (昭二八卒、鹿児島県)
- 理事：林田 素行 (昭四四卒、熊本県)
- 幹事：小田原雄蔵 (昭一九卒、鹿児島県)

平成十六〜十七年度の上海センターの活動について

上海センター長 山本裕美

上海センターは二〇〇二年十二月に設立以来その活動は前年度に比べて益々盛んになっていく。平成十六年度の国際シンポジウム・セミナー等は以下の如くである。

国際セミナーの第一回目は「中国の西部大開発について」(四月二十三日)を、二回目は「今日の東北アジア経済と朝鮮半島経済」(報告：深川由紀子東京大学教授、安秉直ソウル大学名誉教授・福井県立大学客員教授) (二月十日)を、三回目は「応用一般均衡モデルによる日中韓FTAの効果分析」(報告：高鐘煥国立釜慶大学校副教授、韓国) (二月十四日)をそれぞれ開催した。

国際シンポジウムの一回目は「中国特需―脅威からマーケットに变身する中国」(報告：於同申人民大学教授、前田辰巳京セラ常務、大西広副センター長) (七月二日)を開催した。二回目は「中国と日本の政治経済学」(国際シンポジウム(COEと共催)(報告：張小金廈門大学教授、三田剛学術振興会特別研究員、本山美彦教授・上海センター運営委員、山本裕美センター長、大西副センター長) (三月十六日)を開催した。

国内シンポジウムは第一回目は「中国の自動車産業―その過去・現在・将来を探る」(報告：丸川知雄東大助教授、大原盛樹アジア経済研究所研究員、塩地洋教授・上海センター運営委員その他) (十一月十三・十四日)を、第二回目は「エレクトロニクス産業の中国戦略」(報告：安積敏政松下電器産業グローバル戦略研究所首席研究員、上野正

樹神戸大学講師) (二月十九日)を開催した。

講演会の第一回目は「メコン開発をめぐる東アジアの域内協力」(講師：的場泰信海外農業開発コンサルタント協会専務理事) (十一月十八日)を、講演会の二回目は「最近の中国事情と今後の日米中関係における日本の積極的役割について」(講師：木村一三日中経済貿易センター名誉会長) (二〇〇五年一月二十四日)をそれぞれ開催した。

また米国流の新しく昼食をかねてのブラウン・バッグ・ランチ(BBL)セミナーを月一回開催している。その第一回は「東アジアで何が起きているか」(講師：垂秀夫外務省国際情報統括官組織第三国際情報官)であった。

平成十七年度では四月十八日に第一回講演会「グローバル化と国有企業改革」(講師：楊瑞竜人民大学経済学院院长)を開催した。四月二十八日に第二回講演会「EUの東方拡大と東アジア共同体の可能性」(講師：ブラゴベスト・センドフ駐日ブルガリア大使)を開催した。更に四月二十日にはBBLセミナー第二回「中国の農民負担問題」(講師：岩井茂樹京大人文科学研究所教授)を開催した。

国際会議共催では、上海センターは、平成十六年六月二〜四日に台湾の国立政治大学台湾研究センターが主催の国際シンポジウム「中国の経済発展の諸問題」に共催の形で参加した。上海センターからは山本センター長、大西副センター長、北野副センター長がそれぞれ報告した。台湾センターは英国のロンドン

大学東洋アフリカ学院(SOA)と交流協定を締結していることから、中国農業問題研究者として著名なR・アッシュ教授が参加した。

平成十七年五月二十四日には上海センターは、在瀋陽日本総領事館に協力して「日中経済交流セミナー」を共催し、大西副センター長、塩地教授、大森経徳上海センター協力会副会長、稲田堅太郎同協会会員が報告を行った。また七月一日には「政冷経熱」国際シンポジウムを開催して時殷弘人民大学教授、竹内実京大名誉教授、高井潔司北海道大学教授を招待して講演、討論を行なう予定である。

国際会議参加では平成十六年五月二十五〜二十七日に上海で開催された世界銀行・中国政府財政部共催の「貧困削減スケールングアップ会合」に山本センター長、北野副センター長は日本国際協力銀行のアドバイザとして参加した。世界銀行の会議は中国内外から三千人以上の参加者があった大規模な国際会議であり、貴重な経験を得ることが出来た。また北野副センター長は、八月十九・二十日に開催された吉林大東北アジア研究院主催国際会議「北東アジアの平和と発展」に参加して報告した。山本センター長は十一月三〜五日に開催された復旦大学日本研究中心主催「東アジア発展モデルと地域協力」第十四回国際会議に招待されて報告を行なった。

尾池和夫京大総長が八月一〜三日に開催された北京大学主催の日中局長会議に出席され、山

本センター長が随員として同行した。日中局長会議以後尾池総長は八月四日に復旦大学を表彰訪問され、山本センター長、北野副センター長が同行した。また尾池総長は同大学日本研究中心にある上海センター支所を訪問された。また西村周三研究科長は十月十八日に復旦大学を訪問して「日本の年金制度改革」について講演を行い、好評を博した。

上海センターは中国における会議参加者への支援を行なっているが、平成十七年度において曳野孝助教授の復旦大学におけるアジア経営学会国際会議への参加、坂出健助教授の山東省青島における国際会議への参加に対して旅費等を援助した。

上海センターは上海センター協力会会員に対して『上海センターニューズレター』(電子版)を発信しているが、幸い好評を得ている。更に記録を残す意味もあり、二〇〇四年四〜十二月刊行のニューズレターの合冊本(第一〜三十七号)を刊行した。

図書収集・整理に関しては、まず森棟基金による中国の統計年鑑、経済年鑑、産業年鑑類の整備を行い、二百冊以上収集することが出来、すでに関西の大学でも有数のコレクションとなっている。今年度も同基金によってこの中国の図書収集作業を続行している。また堀和生教授をリーダーとする「堀プロジェクト」において森棟基金からの支援を受けて戦前期の経済学部所蔵の中国関係の図書資料の整理が進行している。戦前期の本学部の中国関係図書資料のコレクションは日本有数のものであり、このコレクションの整備は今後の我が経済学研究科の中国およびアジア研究に大いなる資産となることが期待出来る。